

韓国社会における「無縁社会」の現れ

—KBS パノラマ「韓国人の孤独死」と

2014 年国政監査政策資料集から—

JEON Yongwoo

韓国では、2014 年 5 月 22 日、29 日に KBS パノラマ「韓国人の孤独死」が放送された。また、教育番組の EBS も 2014 年 12 月 2 日にドキュプライム「青春、孤独死を語る」を放送した。「孤独死」の用語が韓国社会においても、違和感なく使われるようになった。「孝」や「縁」、「絆」を何より重要視した儒教思想の強い韓国で、一人で孤独に死ぬ「孤独死」や各社会から孤立した結果、誰にも看取られずに死ぬ「孤立死」を念頭において生きていかなければならなくなった。このような社会像を NHK が主張している「無縁社会」を使い、韓国社会を見ていく。

「無縁社会」を語る際に、日本ですでに使われている用語について整理する。一人で死んだ場合、その死を語る時「孤独死」「孤立死」「無縁死」「独居死」「自立死」が用いられている。しかし、各「死」の意味は違いがあるものの、韓国内でも研究において「孤独死」の用語が使われていくようになってきた。しかし、一人で死んだ場合に背景や死の形態などを関係せずに何であれ「孤独死」と名づける傾向になっている。また、韓国で独特に使われている用語がある。それが、「縁故者」と「無縁故者」である。特に、「無縁故死亡者」の用語が使われており、NHK で紹介している「無縁死」された者のことを指す。家族や親族といった血縁関係の有無や関係の程度により、「縁故者」あるいは「無縁故者」に分かれる。また、「縁故者」がいた死亡者が何らかの事情から「遺体引き取り拒否届」が警察に出され、「無縁故死亡者」になる事例を紹介する。

日本では、1995 年に起きた阪神・淡路大震災のため、多くの被災者たちが仮設住宅生活を送らざるを得なかった。しかし、仮設住宅生活から「孤独死」問題が起こり始めた。その後、2005 年に NHK で「ひとり団地の一室で」を放送、千葉県松戸市の常盤平団地を中心に起こった「孤独死」と「孤独死問題」に対応していく姿を紹介した。2010 年には「無縁社会～“無縁死” 3

万 2 千人の衝撃～」が、2013 年には「終の住処はどこに 老人漂流社会」が放送された。

前述のように、韓国では孤独死をめぐる「孤独感」と「社会的孤立」が主に研究され始めたが、主に、高齢者における孤独感と孤立に焦点が当てられていた。本格的に孤独死の研究がされ始めたのは 2010 年である。2010 年に「高齢者の孤独死、防ぐことはできないのか」という討論会が国会献呈記念館大講堂で開催された。討論会で「高齢者の孤独死の現況と課題」「孤独死予防のための高齢者見守りサービス強化策」が発表された。

「無縁社会」を語る時に欠かせないのが「社会的孤立 (social isolation)」の社会現象である。社会学研究の中で「社会的孤立」を初めて使ったのは、ピーター・タウンゼントである。タウンゼントは、「孤独」と「孤立」を分けて使い、「孤独」は主観的なもので、「孤立」は客観的なものであると説明した。タンストールは、孤独の諸形態を紹介し、独居、社会的孤立、孤独不安、社会的植物人間化:アノミーがあるとした。

本論文では、韓国はすでに「無縁社会」の影響を受けていることで、韓国社会はいつから「無縁化」が進み始めたのかを把握する。韓国社会の姿に変動をもたらした「高度経済成長期」と「通貨危機」を時期として、社会変動と家族の変化を見る。

「高度経済成長期」以前とその当時、そして「通貨危機」以降の 3 つの時期から家族形態とその変貌を見る。韓国は、日本における植民地支配を受け、そして朝鮮戦争まで経験した。そのため、植民地時代の資料は残っていないが、朝鮮戦争以降の記録は簡易国勢調査により残されている。世帯平均人員が 1955 年には 5.66 人であったが、2010 年には 2.7 人まで減っている。大家族であった韓国が核家族、単身世帯にまで、家族形態が変わっている。

韓国ではまだ孤独死に関する実質的調査が行われていないため、公式的なデータは公表されていない。そのため、メディアが出している事例に頼るしかないという現状がある。まず、各新聞社が出している孤独死関連記事をまとめた。次に、メディア報道では KBS と EBS が警察庁と自治体と連携し、また大学生の取材をもとに孤独死事例を紹介した。

各事例から抽出された共通的なパターンを分析し、「無縁性」への考察をする。次の角度で考察をする。①「一人暮らし」である。韓国で取り上げられる孤独死事例は一人暮らしていた人に集中しているからである。②「自殺」である。日本では額田氏が提起した「孤独死」以外、孤独死事例の中に自殺(自死)は含めていない。ところが、韓国では孤独死事例を分類するにあたって、自殺も含まれていることが分かる。③「孤独死用語の未整理」である。孤独死と関連する死の形態として「孤立死」「無縁死」「独居死」「自立死」がある。しかし、韓国ではすべてを「孤独死」として使われている。④経済的困窮である。韓国での社会的孤立の特徴として、経済的な貧困がある。経済的に貧困であるほど、孤立したり、家族の絆が薄くなったりして、縁故者から無縁故者に

なるケースが多い。⑤生活破綻(生活後退)とアルコール中毒が見られる。貧困とともによく見られるケースが、ゴミ屋敷状態あるいはアルコール中毒である。日常生活が乱れ、生活水準を後退させ、破綻まで至る。また、孤独死した事例では、アルコール中毒による合併症から死に至ったケース、墜落死などが見られている。⑥「縁故者」であった人が「無縁故者」になることが見られる。韓国社会において何より重要視していた「家族(血縁)の解体」を指す。「縁故者」であることは、家族、親族がいることを前提として成り立つのである。しかし、「無縁故者」は何らかの事情により家族、親族がない場合を指す。ところが、韓国の葬儀法では、葬儀に関しての義務や実行を家族、親族が責任を取らないといけな。無縁故死亡者扱いになれば、家族・親族ではない行政(自治体)が遺体を引き取り、葬儀を行い、管理される。⑦社会的繋がりがあったケースが多い。基礎生活受給対象となり、社会保障制度と繋がっている事例や、韓国で特徴的に見られる宗教団体(キリスト教)との関わりがあったケース、近隣住民との繋がりがあったケースがある。しかし、全部「孤独死」とされ、ある期間を経て第三者あるいは機関により発見された。これは、韓国社会の地縁の解体を示している。何等かの形で社会とのコネクション(Connection)は持っていたが、薄かったり、切られたりして「孤独死」している。

韓国では 2015 年に「不幸(者)防止法」を通そうとする動きがある。しかし、韓国社会はすでに「無縁化」が進み、家族・地域の解体といった社会現象が起こっている。それを法律あるいは儒教思想に基づき親孝行を行うということは、韓国社会が直面している現状とはズレがある。さらに遺産相続権に関して血縁・親族関係の状態を法律で定めることは無理がある。時代が変わることともに、家族の形態や地域のあり方も変わり、いわゆる「孤独死」は今後韓国において避けられない課題ということは確かである。しかし、ある特定の年齢や集団だけに起こる社会問題ではない。「孤独死」は誰にでも起こりうる。孤独死する前の段階で、社会的に孤立していることが問題であり、社会的に孤立している人々への福祉的な支援は今後の課題となってくる。